

R2 地域協働研究（ステージⅠ）

R02- I -10 「多様な家庭の未就学児の親子を対象とした読書支援プログラムの開発」

課題提案者 北上市立中央図書館

研究代表者 社会福祉学部 櫻幸恵

研究チーム員 児玉康宏（北上市立中央図書館） 下平なをみ（社会福祉学部）

村上那子（社会福祉学研究科前期課程）

<要旨>

本研究では、地域における教育機会の格差縮減を目指し、本に触れる機会の少ない家庭で育つ子どもの読書習慣を涵養するため、未就学の子どもと保護者を対象に読書に関する実態調査及びその結果に基づく公立図書館の機能を活かした新たな読書支援プログラムのあり方を検討した。具体的には北上市をフィールドに未就学児の家庭を対象に読書習慣や読書に対する意識、生活状況などについて質問紙調査を実施し現状把握と課題抽出を行った。調査の結果、読書習慣が希薄な家庭や読書環境が整わない家庭にこそ公立図書館に対する潜在的ニーズがあり、また、多様な家庭に育つ子どもの読書習慣の涵養には、教育と福祉が連携した新たな枠組みでの読書支援プログラムが必要であることが判明した。

1 研究の概要（背景・目的等）

読書活動や読書習慣に関する北上市による先行調査では、読書への関心が希薄な子どもや保護者の増加が確認され課題となっていた。秋田(1992)によれば、保護者が読み聞かせや図書館に連れていくなど子どもに直接かかわることが子どもの読書の感情に大きく影響し、物理的環境だけでなくむしろ参加の機会を子どもに与えるような親からの働きかけという社会的環境が重要であるとしている。

しかし、「平成30年度北上市子どもの生活実態調査」では、ひとり親世帯の4割は貧困基準以下で生活し、時間に余裕がなく6割が子どもに必要な医療受診ができしていない。調査結果からは仮に子どもの読書に関心があっても読書環境を整えたり、親が子どもへ働きかけを行うことが容易でない状況が示唆され、地域における子どもの教育機会の格差が懸念された。

このことから、読書への関心が希薄または読書環境を整えることが困難な家庭にこそ、社会教育機関である公立図書館に対する潜在的ニーズがあると推測された。そこで本研究では、未就学児の家庭に対し読書環境・読書習慣及び生活状況に関する調査を行い、それを踏まえて「生活の中における図書館(the library in the life of the user)」の視点に則り、新しい読書支援プログラムのコンセプトの検討及び具体的なプログラム実施案を作成することを研究目的とした。

2 研究の内容（方法・経過等）

本学と北上市立中央図書館の連名で、北上市内の保育園・子ども園に通園する3歳児と5歳児の保護者を対象に、質問紙調査を実施した。質問項目は、家族構成や読書意識、読書環境、子どもへの働きかけ、子どもと本の関わり、図書館への意識や関わり、保護者の生活実態など多岐にわたる。配布数は753票、有効回答数は541票、有効回収率は71.8%だった。集計結果に基づき分析を行った。なお、予定していた保護者へのインタビュー調査や県外での先駆的実践調査は、新型コロナウイルス感染拡大によりやむを得ず中止とした。

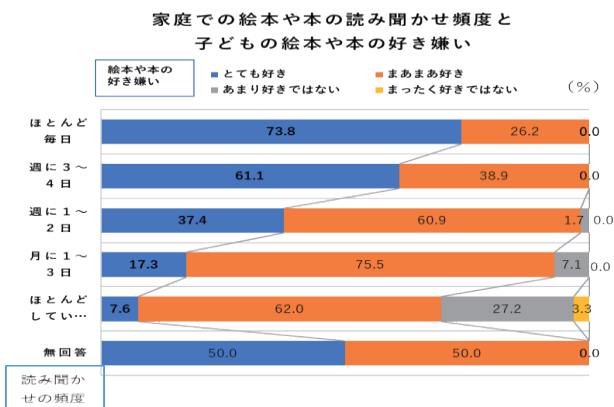
3 これまで得られた研究の成果

(1) 調査結果の概要（抜粋）

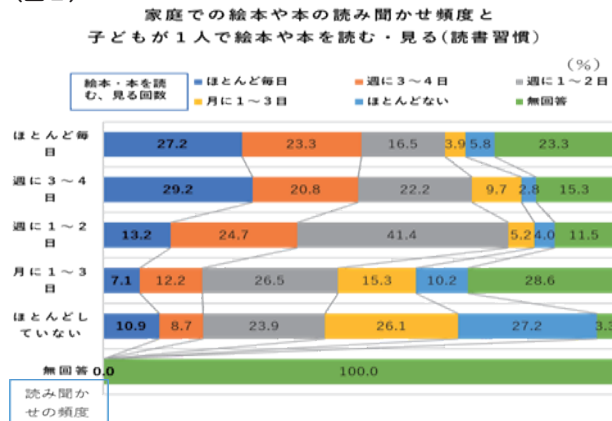
調査結果からは、以下のことが確認された。

① 「家庭での読み聞かせ頻度」と「子どもの本の好き嫌い」、「子どもの読書習慣」には其々明らかな関係性がみられた（図1）、（図2）。

（図1）

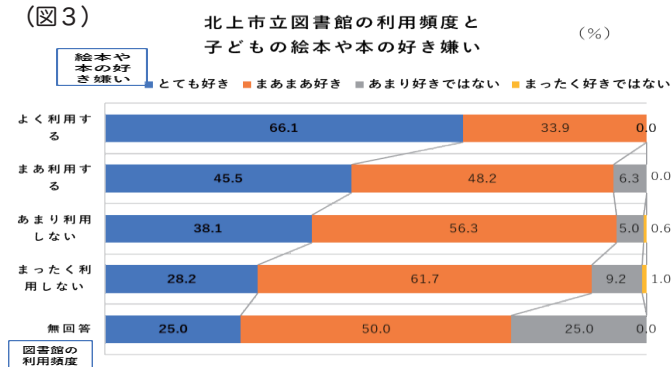


（図2）



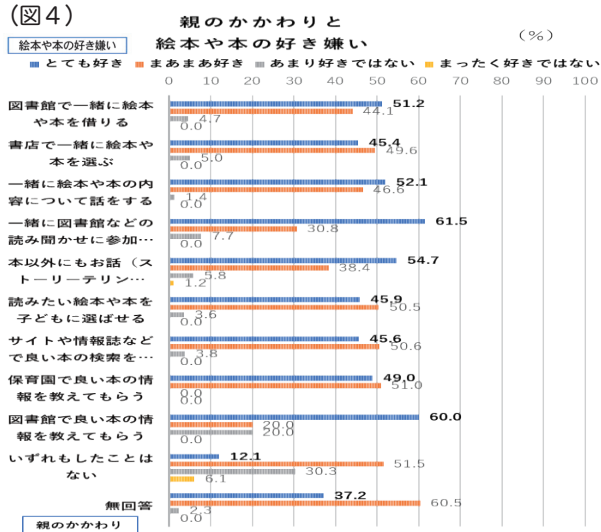
② 「図書館利用頻度」と「子どもの本の好き嫌い」には明らかな関係性がみられた（図3）。

（図3）



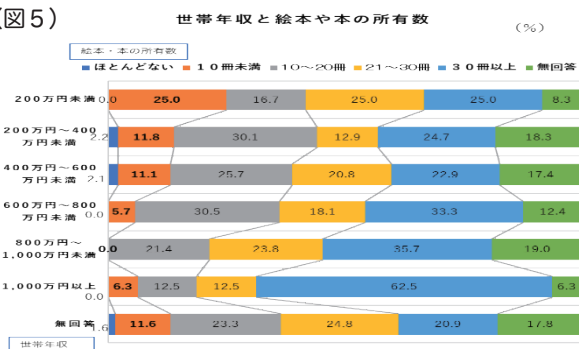
③ 「親の子どもへの働きかけ」と「子どもの本の好き嫌い」には明らかな関係性がみられた（図4）。

（図4）



④ 一方で、「世帯収入」は「家庭の蔵書数」を制約していた（図5）。また、「読み聞かせができない理由」の6割は「時間がない」ことであった。

（図5）



⑤ 全体の9割が、子どもが本好きになってほしいと回答しているが、図書館を利用する世帯は全体の3割に過ぎない。特に世帯収入が200万円未満では、ほぼ10割が本好きになってほしいと回答しているが、実際に図書館利用をしている世帯は8.3%と著しく低い。また、ブックスタート事業の配布絵本を活用する世帯は全体の4割に留まり、配布のみでは効果が限定されることも確認できた。

⑥ 図書館イベントの希望については、図書館の貸切利用28.3%、絵本や児童書の読み聞かせ講座25%、古本市や本の福袋17%、子どもと離れて読書を楽しむ17%、絵本を使った子育て講座16.3%などがあった。

（2）調査結果からの考察

上記の①～③の調査結果は、秋田(1992) がいう「子どもと直接かかわることの方が、子どもの読書に対する感情に影響を与える」、「参加の機会を与えるような親からの対人的な働きかけという社会的環境が重要である」と一致する。また、④⑤では環境要因により、家庭の蔵書数や親の関わり、図書館利用の頻度に大きな差異がみられた。子どもと本の関わりには多くの保護者が肯定的な関心があるにも関わらず、実際には子どもへの働きかけが希薄な家庭が一定数あった。

乳幼児期における本への親しみは、その後の学習に影響を与えることが懸念されることから、未就学児の家庭に対して公立図書館として新たな読書支援プログラムを構築し、特に図書館を利用していない世帯に対し積極的な働きかけを行う必要がある。また、調査からは時間や金銭的な余裕がないひとり親など、生活課題を抱えた保護者が利用しやすい工夫、読書支援と生活支援を兼ねた教育と福祉が連携したワンストップサービスのプログラム設計、利用者の希望を活かした集客力のある催事の工夫が必要であることが把握された。

4 今後の具体的な展開

上記の調査結果を踏まえ、図書館利用に対する阻害要因を持つ市民の潜在的ニーズ応えるために、ステージⅡでは特に、乳幼児期の親子に対し、福祉と社会教育が連携した読書支援プログラムを企画・実践する以下の実装研究を予定している。

- （1）保健・子育て支援複合施設と連携し、親と子どもへの読書支援と子育て相談のワンフロア・サービスの実践・検証
- （2）読書支援・子育て支援の複合的な参加型研修プログラムの実践・検証
- （3）図書館開放による子どもの居場所としての新たな空間を設定し、親子で自由に本を楽しむプログラムを実践・検証

5 その他（参考文献・謝辞等）

【参考文献】

- ・秋田喜代美（1992）「小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響」発達心理学研究 3（2）90-99
- ・猪谷千春（2014）「つながる図書館 - コミュニティの核を目指す試み」ちくま新書
- ・北上市（平成28年）「北上っ子読書活動推進プラン」（平成31年）「北上市子どもの生活実態調査結果報告書」
- ・久野和子（2014）「新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」（Library as Place）研究—その方法論を中心にした考察」図書館情報学 268-285
- ・永田潤子・遠藤尚秀（2020）「公立図書館と都市経営の現在—地域社会のきずな・情勢へのチャレンジ」日本評論社